

『この平らな地球』における暴力の痕跡

伊藤ゆかり

Traces of Violence in *This Flat Earth*

ITO Yukari

Abstract

Lindsey Ferrentino's *This Flat Earth* depicts how the shooting in school, in which nine pupils were victimized, affects a thirteen-year-old girl. Without any specific description of the violence, the aftermath of the shooting reveals itself in three ways. The first way is how the protagonist, Julie, responds to the event. At first she cannot express her feelings about the shooting at all; gradually she struggles to find out her true reactions to the violent event as well as what the shooting implicates to her. The second thing the play relates is the reactions of the adults: Julie's father, Dan, and Lisa, the mother of one of the victims. Whereas Dan focuses on dealing with his daughter, Lisa tries to keep doing what and how she did before her daughter was victimized. Lisa's behavior leads to the critical change in Julie's life. Finally, in responding to the shooting and its influence on the adults, Julie develops her relationship with her neighbor, which gives her a new perspective on her life from the past to the future. Thus, the violence of the shooting brings about the significant changes in the lives of the characters.

キーワード：リンジー・フェレンティーノ、『この平らな地球』、学校における銃撃
key words: Lindsey Ferrentino, *This Flat Earth*, shooting in school

Lindsey Ferrentinoは、キャリアは浅いものの、2015年に初演された『醜い骨』*Ugly Lies the Bone*で注目されたアメリカの女性劇作家である。彼女は、NASAのロケット発射が見えるフロリダ州の小さな町Merritt Islandに生まれた。¹⁾あるインタビューにおいて、NASAの近くで生まれ育ったことの重要性を語っており、それが『醜い骨』に表れている。²⁾17歳のときにニューヨークに出て、大学で演技を専攻するものの、間もなく関心は劇作に移る。ロンドンで学んだ後、ハンター・カレッジおよびイェール演劇科において劇作で修士号をとった。イェール演劇科在学中に執筆した『醜い骨』は、ニューヨークおよびロンドンで上演され、Kesserling Prizeを受賞し、Suzan Smith Blackburn Prizeの最終候補作にな

るなど、高く評価された。³⁾この劇では、アフガニスタンで重傷を負って除隊し、故郷の町に戻った元女性兵士が、治療を受けつつ、家族やほかの人間たちと新たな関係を築き始めるまでが描かれる。元兵士のトラウマを題材とした点では9・11後のアメリカを描いた戦争劇の範疇に含まれるが、家族との関係の変化を描く作品でもある。『この平らな地球』*This Flat Earth* (2018)と『エイミーと孤児たち』*Amy and the Orphans* (2018)も、それぞれ独自の視点から家族を描いていることを考えると、フェレンティーノはアメリカ演劇の伝統である家族劇の系譜に連なる作家と言えよう。

本論文は、『この平らな地球』が、学校における銃撃という暴力的な事件が13歳の少女と家族をはじめとする周辺の人々に与える影響をいかに

描いているかを分析する。

I

『この平らな地球』は、あるミドルスクールにおいて銃撃事件が起きた後の出来事を、その学校に通う13歳の少女を中心に描いた劇である。「最近の出来事」という設定で、舞台は「おそらくニューイングランドの東海岸に面した海辺の町」とあり、そこでは、海岸近くは裕福な人々が住み、丘を上がるにつれて、貧しく、古い家が並ぶ地域となる。⁴⁾主人公のジュリーには、いかにもミドルスクールの生徒らしい子どもらしさがある (n. page.)。父のDanは30代後半で、かつてはコメディアンだったらしいが、今は飲料水の会社に勤めている。劇は、親子が住む丘の上のアパートで展開する。

劇はチェロ奏者の演奏とともに始まる。やがてアパートの上の階でClorisがレコードをかけ、その音でジュリーはベッドの上で身を起こす。彼女が父に叫ぶ「そこにいるの？」が劇の最初の台詞である (1)。Danはリビングから、壁の向こう側にいる、と答えるが、ジュリーはもう一晩彼女の部屋に来てほしい、と懇願する。Danは娘の部屋で、彼女が聞いたのは上の部屋のレコードの音で、音が何かかわかれば怖くない、と言い聞かせる。さらにジュリーが質問をしかけると、その問いに先んじるように、それは雨の音、トラックの音、風で木が窓に押し付けられる音、といろいろな音を挙げていく。次第に、ジュリーの問いかけもDanの答えも、以下のように短くなる。

JULIE : And—

DAN : Wind—

JULIE : And—

DAN : Rain.

JULIE : And—

DAN : We're in here. And it's *all* outside…

(4-5)

二人のことばの短さから、夜になると彼らが同様のやりとりをくり返していることが推察される。この時点で銃撃事件への言及はまったくない

が、ジュリーが幾晩か一人では寝られないような不安を抱えていることが示される。

翌日、ジュリーは、自分の部屋のベッドの上で、同級生のZanderとパソコンでホラー映画を観ている。Zanderは機会がある毎にジュリーの体に触れようと試みていて、そのうちに彼女の手を握りたい、と言い出す。すると、ジュリーは学校を出るときは手をつないだが、それはあの日だったからだ、と言う。ここでも「あの日」になにが起きたのか説明がないまま、子ども達が特殊な日を過ごしたことが明らかにされる。その一方で、二人の会話は、ホラー映画や、後ろから見るとショートパンツで、前からはスカートに見えるスコートのことなどの日常的な、たわいのないものが主である。

他方、Danはと言えば、段ボール箱をいくつも抱えて、家に帰ってくる。彼と共にリビングに入ってきたのはLisaである。Danはリサの物をアパートに運んできたらしい。Zander、次にジュリーがDanの帰宅に気づく。やがて彼女は父親と一緒にいるのは、Noelleの母親ではないかと言い出す。その日リサが学校でスピーチをしたため、声に聞き覚えがあったのだ。Zanderもジュリーも確信がもてないでいると、リサが、「夫もわたしも一人づきあいを再開しよう—がんばっているの、早すぎる気もするけど」と言ったため、二人はノエルの母親だと確信する (15)。

さらに段ボール箱を取りに大人たちが外に出た時に、ジュリーとZanderはリビングに入る。彼女の友達やその親を家に招こうとしないDanが、リサを家に入れたことを不審に思っているジュリーは、自分が身に着けているスコートがノエルの古着であることを思い出す。ノエルが母親と一緒に服を慈善団体の店にリサイクルに出したのを見かけたジュリーは、その服を全部買ってもらったのである。Zanderは、よりによってリサがスピーチをした日にノエルの服を着たなんて信じられない、と驚く。ホワイトハウスから来た人のためにバイオリンを弾かなければいけないから、ブランド物の服を着る必要があった、とジュリーは弁解する。Zanderは、死んだ愛犬用の綱を彼が

しばらく持ち歩いたように、ノエルの服を着てあげたかったのではないかと、ジュリーに尋ねるが、彼女の答えは、「ノエルはうぬぼれやだと思っていた」とにべもない(17)。ザンダーは、ノエルはいい服を沢山もっていたが、両親はどうするつもりだろう、と言出し、ジュリーとともに、ノエルのベッドや部屋はどうなるのだろう、と考える。

彼らの会話から、ホワイトハウスから政府の要人が来るほどの追悼式が開かれ、ノエルが犠牲者の一人であることがわかる。さらに、ノエルの家は裕福であることも台詞から明らかである。ジュリーは、ここで「ノエルがサマー・キャンプに行ったきりみたいに部屋をそのままにしておくのかしら、それともノエルの物はみんな捨てて、最初からいなかったみたいにするのかな」と言い出す(19)。ザンダーとジュリーは少しの間黙り込むが、ザンダーが、副大統領は口がくさかった、と言ったことがきっかけで、二人は副大統領や大統領の話ではしゃぐ。だが、ジュリーが犠牲者の家族のことを「死んだ子の家族」「the dead kid families」という言い方をし、冗談まで言おうとするので、ザンダーは「冗談にしちゃいけないこともあるよ」と咎める(21)。

ザンダーとジュリーが会話を続けていると、ダンが段ボール箱を持って戻り、二人に箱にさわらないように言って、また外に行く。ジュリーは、日本に行って、胸が大きくなるマッサージを受けたい、と話す。そのためにだけ日本に行くなんて、というザンダーに、ノエルは本当に胸が大きかった、とジュリーはまたノエルの話を始める。ノエルの棺だけ蓋がはずされていたのに、胸を見なかったのか、とジュリーは尋ねるのである。犠牲者の遺体が劇中で言及されるのはこの場面だけだが、ジュリーが自分の胸と比較してノエラの胸を気にするので、観客の関心がノエラの死をもたらした暴力に向かうことはない。そのうえジュリーは、胸が大きいと撃たれてしまい、ぺちゃんこだと生き残るのだ、と言い出す。⁵⁾ ザンダーはそれに対して、上級生は校舎の別の側において、自分たちの同級生で撃たれたのはノエルだけだと指摘する。さらに、彼は、追悼式で校長は悪いことが起

ると人間は正しい道を進もうと思うものだ、と言ったと話す。それに対して、ジュリーは、9人生徒が殺されたために、胸が平たいのは良いことだと気づくということか、と皮肉を言う。

ここでようやく、ジュリーたちが通うミドルスクールにおいて銃撃で9人の生徒が殺されたことが明らかになる。しかし、事件について観客が知り得る事実はこれのみで、たとえば、どのように銃撃が起き、犯人はどんな人間だったのか、といった具体的な内容はわからないままである。

事件の詳細はともかくとしても、ジュリーの言動は、胸の大きさのことといい、事件の衝撃性とは不釣り合いなことが多い。ザンダーも、ジュリーよりは犠牲者のことを気にするものの、たわいのない、子どもらしい会話を交わすし、彼女の体をさわりたいがるなど、事件直後にはふさわしくないような行動をとる。状況と照らし合わせるとちぐはぐな二人の言動については、作品の解説においてSarah Lunnieが書いていることが参考になろう。2012年12月に小学校で銃撃事件が起きたNewtownは、ラニーの隣町だと言う。今や事件のことを考えずにニュータウンのことを口にすることはできなくなったが、彼女が故郷の町の書店や映画館などで過ごした時の思い出は、ごく普通なものだからこそ、次々とよみがえってくると述べ、さらに次のように書いている。

It was for this reason, I think—because the place is so specific, for me, and loaded with so many commonplace associations—that I experienced, in the days that followed the shooting at Sandy Hook, a particular quality of dissociation and disorientation; a cowed, confused struggle to integrate the unfathomable into my conception of a place that previously felt not just safe, but (and here, a privilege reveals itself) *ordinary*; an inability to square the horrifying information with the benign banality of what once felt like the truth.

It's a dissonance that Lindsey captures

with extraordinary precision and sensitivity in *This Flat Earth*.⁶⁾

ジュリーとザンダーが感じているのは、ラニーが言う混乱であり、不協和音なのであろう。安全で、ごく普通であることが当然だった日常からの分裂と言ってもよい。しかし、二人は自分たちの内面を明確に表現することができない。追悼式のことを話題にする時点で、二人とも事件について、自分がどう感じているのか、さらに、どう考えるべきか、どのように反応していいか、わからずにいる。副大統領が小さな町に来るような特殊な出来事が起こり、ジュリーは、自分が一人では眠ることができないという特殊な状態にあることは認識しているし、ザンダーは、着る服や冗談に関してすべきではないことがあると思っている。だが、自分の感情をどう扱っていいかわからないまま、せめて「ごく普通」の態度を示そうと、ホラー映画を見たり、どうでもよい話をするのである。

II

銃撃について自分がどう思っているのか、よくわからないジュリーとザンダーだが、次第に気持ちを言葉にするようになる。きっかけになるのは、上でどさりという大きな音がするときである。ジュリーは思わず悲鳴を上げて、床に身を伏せた後、上の階の老女クロリスが心臓発作で死んだのかもしれない、と言い出す。それに対して、ザンダーは以下のような反応をする。

ZANDER : —please, could you *please* stop talking like you don't care about people dying.

JULIE : I *do* care. But I'm not—*SAD*—Are you?

ZANDER: …

JULIE : *IT'S* sad, horrible, the *WORST* thing literally ever, but—I wish everybody would shut-up about how *sad* they are so they'd tell us why.

ZANDER : ..I cried more when my dog

died. *Does that make me a bad person?*

JULIE : You knew your dog better plus he could do so many cool tricks. (28)

周囲の人々はどんなに悲しいことかと話すばかりで、それは子どもたちが感じていることとはずれているのだ。

ジュリーの話は上の階に住むクロリスのことになる。父が読み終わった新聞をあげていること、その際彼女は父に冗談を言わせることなどを話し、一番いやなのは彼女がチェロの曲をかけることだ、と言う。それでも老女のことが気になり、二人は窓から非常階段に出て、彼女の部屋をのぞくことにする。暗い部屋をのぞき込もうとしながら、ジュリーはザンダーに、胸がぺちゃんこだと生き残るとい自分の説をどう思うかザンダーに尋ね、犠牲者の生徒たちのことを思い出させようと、全員の名前を言っていく。事件について不適切な物言いをするジュリーだが、犠牲者の名前を覚える程度には関心をもっているのだ。子どもたちは、クロリスに「誰かいるの?」と呼びかけられ、慌てて階段を駆け下りて、ジュリーの部屋に戻ると、ダンとリサも戻ってくる (32)。

子どもたちは、リサがまた来たことと、ダンとバーベキューの話が続いていることに驚く。ザンダーが帰り支度をしてリビングに行くと、ダンがリサのことを紹介する。「ハリスさんだよ」とダンが言うと、リサは「ノエルのママでいいのよ」と言う (35)。ザンダーは彼女に挨拶をしないまま、逃げるように去る。一方、リサはジュリーに会いたがる。父に呼ばれて、ジュリーは慌ててパンツに着替えて、ノエラのものだったスコートをごみ箱に投げ入れる。その間リサはステーキ用の肉をだめにしてしまった話をダンにしている。夫の会社が送ってくれたのだが、事件以降外出しなかったため、配達された肉に気づいた時には腐っていたという。ダンがどう反応すべきかわからずにいると、リサは、それがサインだと思った、と言い、「何のサインかわからない。でも、サインを探しているの」とつづける (37)。ダンに再度呼ばれて、ジュリーはリビングにやってくる。リ

サが話しかけても、小さな声で答えるだけだが、ダンと一緒に彼女の家に食事に来てほしい、と言われて、思わず、「行きたくない。パパ、行かないといけけないの？ 気味が悪い」と言ってしまう(38)。リサに謝るよう父親に言われると、ジュリーは部屋から走って出ていく。

リサは、ダンの謝罪に答えず、スピーチをして気分が良くなったので、段ボールの山を一人で処理できると思っていたが、結局保管スペースがあまりないダンに迷惑をかけている、と話す。つづいてリサは、丘の上にあるこの建物からの眺めがすばらしい、と言って、彼女たち夫婦も、引っ越しを迷っている時にレストランの外の情景の美しさに移住を決意した、と思い出を語る。ダンも、寄付やボランティアのおかげで最近特に周辺がよくなった、と話し、ぎりぎり学区内の場所だと説明する。リサはそろそろ家に帰ると言い、段ボール箱について再度ダンに感謝をして、段ボールを自分の家に持ち込んだり、娘と共に注文をとったものを配達したりすることを考えると、と言って泣き出しそうになる。最後にリサは食事の話はなかったことにしてくれ、と言って、去る。

ダンはジュリーを呼ぶ。リサの家には行かない、と繰り返す娘に、時には居心地の悪いことをしなければならぬのが大人だと言う。自分は大人ではない、とジュリーが言うと、大人になっていくことの一部だ、とダンは答える。何を言っているかわからなくても何か言わなければいけないし、話したくない人と話さなければいけない、居心地が悪い状況の時も含め、いつでもそうしないといけない、と言いつけさせる。ジュリーにはよく理解できない。

段ボール箱に入っているのは、オーケストラのための資金集めで売ったポップコーンだということがわかる。車2台で運ぶほど大量にあった、と父から聞いて、一番ポップコーンを売った生徒は賞品をもらはずなのに、なぜ自分はもらえなかったんだろう、とジュリーは言う。家で雇っている人にポップコーンを買わせた生徒もいたのに、と言う娘に、ダンは、ポップコーンのためにとうもろこし畑を作るといい、トラクターを買ってもし

い、と冗談を言う。ダンによると、子どもの時にジュリーはトラクターの冗談を言ったらしい。

ダンは、夏休みが終わる時いつもしているように、中華料理を食べようか、と娘に提案する。ジュリーは、9月にしたばかりだからいやだ、と言い、登校することへの抵抗感を初めて明確に示す。ダンは、学校では、生徒たちのバックパックを元の位置に置き、ロッカーも前と同じ色に塗って、何もかも事件前と同じにした、と言う。ジュリーは事件が起きた日に提出予定だったコロンブスに関するレポートは出さなければいけないのかと気にするが、当然ダンには答えられない。ジュリーは部屋に戻ると、スコートを非常階段の上から捨てる。それは下を歩いているリサのところに落ちて、彼女はノエルの服だとわかる。

翌朝、親子はクロリスの部屋を訪れ、新聞を渡す。クロリスは、追悼式の写真が昨日の新聞の第一面に出ていたとジュリーに話し、ジュリーはそれを見たがる。

前述したように、この劇においては、犠牲となった生徒が9人であること以外、事件の具体的な詳細は一切描かれぬ。それによって、観客は事件の詳細を気にすることなく、登場人物への影響にのみ集中できるという効果はあろう。さらに大きな効果を上げているのは、追悼式の新聞記事をジュリーが初めて見るこの場面である。見出しには、ただ「またも」「Another」とあった(52)。この見出しによって、われわれ観客の多くにとっても、もはや学校での銃撃事件は「またも」であり、時には犠牲者の数以外の詳細に対する興味は続かないことを罪悪感とともに自覚する。

ジュリーにとって、「またも」という見出しは非常に衝撃的で、初めて彼女は事件に関する自分の感情を爆発させる。ダンに同じような事件が今までも起こったのか、と問いただし、何回起きたのか、と尋ねる。ダンは、事件の数は変わっていくからわからない、と答えるしかない。ジュリーは、前にも起こったのなら、なぜ皆が驚いて、ショックを受けるのか、発生数がわからないくらい起きているなら、なぜ大人はどうにかできないのか、と怒りの声を上げる。それに対する答えを

ダンを持っていない。「どうしたらお前の気分を明るくできるんだろう」とダンが言うと、ジュリーは、「悲しいんじゃない!! なぜわたしが悲しいかどうかしか皆話したがる。わたしは悲しいんじゃない。こんなことが起こる間は学校には戻らない」と言う (55)。Tim Teeman は、ジュリーのように頭のいい子どもが、学校での銃撃事件が初めてだと思っているのはおかしい、と指摘している。⁷⁾ 確かにそのとおりではあるが、おそらくジュリーは、この時まで同様の事件が前に起きたかどうかを考える気持ちの余裕はまったくなく、ただ自分の学校で起きた事件として受けとめようとするだけで精一杯だったのだろう。しかし、ここで初めてアメリカ全土における同様の事件のうちの一つとして、事件について考えるように迫られる。それに対して、彼女は怒りという形で反応するのである。自分がどのように事件を考えているのか、悲しむべきなのかどうかもわからない状態であったのが、怒りというのが今の自分にとって正しい反応であることを自覚する。ジュリーは、「今回起きたようなことが二度とどこでも起きないと約束してくれるれば、学校に戻る」と言う (57)。ダンはしばらく黙った後、一日だけ学校を休んでいい、と言う。

このように銃撃事件にどう反応すべきかわからなかったジュリーは、父に感情をぶつける状態へと変化する。それでは、子どもたちを見守る立場である大人たちは、事件にどう向かい合っているのだろうか。劇の展開をたどりつつ次節で考えたい。

III

Tim Sanford は、『この平らな地球』の主人公を13歳にしたことによって、フェレンティーノは子どもと大人との溝を強調した、と書いている。⁸⁾ 彼の指摘は13歳という年齢に重要性を見出すものだが、子どもと大人の溝を描くということは、子どもだけではなく大人も描いているということである。すなわち、『この平らな地球』は、銃撃事件にどのように対応していいかわからない、親たちの姿をも描き出す。

娘を奪われた苦しみと混乱を強烈な形で見せるのはリサである。夜遅くリサがダンたちの家を訪れ、ジュリーは、またしても彼女を避けて、リビングから出ていく。リサは、ダンのことが好きだし、ジュリーを良い子に育てている、と話始める。リサが何をしに来たのか、ダンには見当もつかないが、彼女は、その日学校の事務室でボランティアを行った話をする。翌年の秋には息子が同じ学校に通うことを考えると、学校に関わっていく必要があるという判断である。「もしジュリーだったのなら、あなたがどうするか本当に想像してほしい」とリサはダンに言う (67)。

LISA : If Julie had the bathroom pass, so was on the other side of the building where she wasn't even supposed to be.

Julie backs up towards her window and runs up the fire escape.

LISA : —and when the school reopens, you don't know what to do. 'Cause you're used to driving there every day. Your morning routine. But now you don't have one, *somehow*. But you get dressed, *somehow*. You drive to school, even though your back seat is empty and you feel like an idiot, but you drive to your child's school, 'cause that is. *STILL*. My child's school. And always will be. And will soon be my son's! (67)

リサによると、学校では警察が金属探知機を使い、持ち物をチェックしていた。そのうえ、こわくて廊下を歩けない生徒もいれば、欠席の生徒も多く、学校は事件前とはまったく異なる場所になってしまった。そして、リサは、彼女はスピーチのなかで学校に来るべきではない人は絶対に来ないと約束したと語り、この訪問の目的を告げる。欠席者について学校の記録をみると、ジュリーの住所にはダンの会社の住所が書かれていた。それは、ジュリーが学区外に住んでいることを示唆する。リサは、この事実を校長に知らせ、校長は午

後に教育委員会に報告した。そのうえで、自分が発見者であることを謝りにきた、とダンに言う。

リサにとって、銃撃事件以前の人生を少しでも取り戻すことが生きるために必要なのである。だから、事件のおかげで無駄になってしまった肉の代わりを買って、バーベキュー・パーティを家で開き、ジュリーをはじめとする生徒たちを呼びたいと思う。同時に、学校も前の姿を取り戻し、前と変わらない秩序を取り戻すことを求めている。しかし、学校は以前の安心な場所には戻りそうにない。リサは、せめて秩序だけでも回復させるために、秩序を乱す存在であるジュリーの排除を決意する。

同時に、リサの行為は、意識しているにせよ無意識にせよ、自分の家に来ることを拒否したジュリーへの復讐でもある。娘が殺されてすぐにパーティに誘うリサは「気味が悪い」というジュリーは、あまりにも正直であり、自分が不可能なことをしていることを痛感させる。息子がやがて通う学校にそのような子どもはいてほしくないと願ったりリサが、事務室でジュリーの住所を見る。彼女にとって、それこそ自分が正しいことをしようとしていることと示すサインだったのだ。それゆえ、リサは校長にジュリーのことを告げたのである。

リサがダンと話している間に、ジュリーはクロリスの部屋に行って、チェロの弾き方を教えてもらおう。そのとき玄関のドアをたたく音がして、ザンダーが現れ、なぜ欠席したのかとジュリーを責める。前にも同じような事件が起きていると知ったから、学校には行けなかったとジュリーは言うが、ザンダーはこの種の事件が初めてではないとわかっていた。避難訓練をしていたのは、大人たちがいつか自分たちの学校にも起こると思っていたからであって、今回の事件は自分たちの番が来たということだ、とザンダーは言う。彼は、銃撃事件の時に学校に残してきたままだったバッグをジュリーに渡した後、事件の日以来、ジュリーと一緒にいない時は彼女のことを考え、一緒にいると自分の髪の毛や手ばかり気にしているから、思い切ってキスをしよう、と誘う。ジュリーは承諾するが、いざとなるとザンダーは身動き一つでき

なくなってしまう。ジュリーは、銃撃の時ザンダーは大人のようにふるまって、バイオリンを動かすのを手伝ってくれて、腕を自分の体に回してくれた、と言う。ザンダーはジュリーを抱く。それは「親密な瞬間だが、恋愛感情というわけではない」(78)。

そこにダンが入ってきて、ジュリーは学校にしばらく行けないというので、子どもたちは驚く。しかもダンは泣いている。ジュリーは今の学校に通ってはいけないのだ、とダンが話すと、ジュリーもザンダーもリサのせいかと尋ねる。ダンは、リサの関与を認めつつ、ジュリーは本当は丘の上の学校に行かなければならないのだが、そこは建物も古く、音楽プログラムもなく、見学に行った時には廊下でけんかをしていたので、今の学校を試すことにした、と打ち明ける。ジュリーは、なぜ自分と同級生の経済状況が大きく異なるのかやるとわかり、「なぜもっといい仕事に就かないの？」と父に言ってしまっ、と謝る(82)。何か解決方法を見つけるまでは家にいるようにダンに言われ、ジュリーは、模範的生徒になり、リサの家にも行って、ノエルの服はもう着ない、とリサに言ってくれ、と懇願する。さらにジュリーが大人なんだからどうかして、と言うと、ダンは、時間が必要だと言って、上の階に行ってしまう。

一方ザンダーとジュリーは、腹立ちまぎれに段ボール箱を開け始める。中にはバブル・マシーンなど資金集めでノエルが手に入れたものが入っている。どうかしてリサの気持ちを変えたいジュリーは、リサに持っていったらどうか、と言う。ジュリーは、ダンの名前でリサにメールを書き、翌朝会うことにする。

一方、ダンはクロリスに幼いジュリーを釣りに連れて行った時のことを話す。グーグルでやり方を調べ、父親がするようなことをしてみたのだ。ジュリーは釣り針を指に刺して泣き出してしまったので、「漁師が指に釣り針をひっかけたら、幸運の印なのさ」と咄嗟に言うと、ジュリーは、釣り針を指にもう一度刺して、涙をこらえて、「今日は運が良い日に決まってる」と言ったのだ(90)。さらに、なぜこの場所に住み始めたか思

い出せない、とダンが言うと、クロリスは、「この一番いいところは、なにもかも見えること。下だったら、素敵な場所であることさえわからない」と答える (91)。

翌朝ダンとジュリーとザンダーはリビングに、リサは玄関口にいる。なぜザンダーとリサがいるのかわからないダンに、リサは、渡すものがあるから来るようダンからメールがあった、と答える。ザンダーとジュリーは、リサの訪問を目論んだことを明らかにする。リサがノエルの物を欲しがるとして、とジュリーが言い、ザンダーはまずジュリーを学校に戻してほしい、と言う。リサが脅迫のつもりかと尋ね、ザンダーは賄賂だと答える。ダンは、まだ弁護士に電話もしていないのに、こんなことをしてはいけない、と言う。ジュリーは、皆が座って泣いているだけで、大人も何もしないから、自分でどうにかしようとしている、と主張する。そして、リサに、自分はリサに何かいいことをして、そのお返しがほしい、と言って、資金集めのコンテストの優勝賞品であるバブル・マシーンを渡し、ノエルは優勝賞品を獲得して、どんなに自慢をしていたかを話す。さらにチェロの個人レッスンを受けて上手に弾いていた彼女に嫉妬をして、なにか悪いことが起こればいいのに、と思っていたが、こんなことは考えていなかった、と告白する。自分のせいで銃撃が起きたというのが自分の理論で、憎むならそれでもいい、と言って、ノエルの服を出す。くわえて銃撃の日にノエルは新しい靴で足にまめができていたこと、上級生の校舎にいたのは好きな男の子をセックスに誘うつもりだったことを話し、次のように言う。

Do you wear shoes in a coffin? And do your hair and nails keep growing after you die? *And why do kids keep dying?!?* And are you mad you spent money on braces if her teeth never got straight and if when she was a baby you knew she'd only ever be thirteen would you have even sent her to school because *what's the point*, wouldn't you just rather hold her????—

did you now at her sixth birthday, her life was halfway done? (102)

ジュリーが言っていることは理屈に合わず、しかも正直な気持ちをぶつけているだけに、娘が犠牲になった母親にとって、なおさら残酷である。しかし、このような言い方で、彼女は事件の理不尽さを許せず、大人も含めてそれについて、誰も何もできないことも許せないことを示しているのである。さらにジュリーが、自分が捨てたスコートも取ってくる、と言うと、リサは服を数着手にして去る。

ジュリーの学校については解決がつかないまま、ザンダーは、学校が別になっても「親友だよ」と確認をして去る(104)。ダンは、事件の日にジュリーが提出するはずだったコロンブスに関する宿題を読む。そこには、遠い昔地球は平らだと人々は信じ、端はどこだと尋ね合っていたが、地球から落ちるのがこわくて、だれも端まで行こうとしなかったことが書かれ、今皆が疑問に思っていることのうち、将来は笑われるものはなんだろうか、と結ばれていた。

このように見ていくと、銃撃事件の結果起きた出来事について何もできないのはダンだけだとわかる。リサは子どもへの復讐という形をとるにせよ、自分なりに秩序を取り戻す試みを行い、ジュリーとザンダーは自身の感情を大人たちにつけると同時に、ジュリーが学校に残るためにできることをする。しかし、ダンは何もできない。

ダンは、事件を娘がどう受けとめているのかわからず、それに対して自分がどうすべきかもわからない。おそらく彼が事件以来していることは、今までどのように娘を育ててきたか振り返ることである。釣りのことをクロリスに話す場面が示すように、一人でジュリーを育てつつ、一般的な父親らしい親であろうとしてきた。だが、一般的な父親がこのような異常な事件に際してどう振舞うか、誰もわかるはずがない。ダンはコメディアンだったが、ジュリーが生まれ、突然妻がいなくなって、もう前のような冗談は思いつかなくなった、と娘に話す場面がある。ジュリーがどんな時

でも冗談を考えようとするのは父譲りであり、それはダンにとって慰めになるとしても、彼自身は、銃撃事件に対抗できる冗談を思いつくこともできず、もはや冗談を言えなくなるのかもしれない。リサ同様、事件はダンの人生を変えてしまった可能性があるのである。

IV

『この平らな地球』は、学校での銃撃事件に対する子どもと親の反応を描いているが、クロリスとジュリーの関係をとおして別の面があらわれてくる。

初めてジュリーがクロリスと長い会話をかわすのは、ダンが仕事に出かけた後、ジュリーが追悼式の写真が載っている新聞を見たくて、クロリスを訪れる時である。クロリスは、手の震えなどに不安を感じつつ、一人暮らしを続けることを望んでいる80歳の女性である。彼女のことを上の階の婦人と呼んでいたジュリーは、この時初めて彼女の名前を知る。そして、なぜトイレの漂白剤と同じ名前をつけたのか両親に聞けばいいのに、と言う。クロリスの両親はもう死んでいるとはジュリーは思ってもいなかったのだ。年をとれば、知り合いはみな死んでいるか、フロリダに行ってしまったかだ、とクロリスはジュリーに教える。ジュリーは、「わたしの知り合いもほとんど死んでいる。ママや学校の子。でもその子たちのことはよく知らないから、いいの」と話す(61)。クロリスとジュリーは、時間と死に関する感覚がまったく異なるのだ。さらに、ジュリーはずっと気になっていたチェロの音楽をクロリスが弾いていたのかどうか尋ねる。腱炎と痔のせいで大した演奏はできなくなったので、レコードをまた聴き始めた、とクロリスは説明する。なぜ今聞き始めたのか、ジュリーは知りたがる。クロリスは次のように、ジュリーには理解できない時間の感覚を語る。

CLORIS : I was your age. Then I was married. Days go by. One day you're married thirty years. The next, he's been dead for ten.

JULIE : —I don't get it.

CLORIS : I don't either. But felt about time. (63)

つづいて、彼女はジュリー親子が引っ越してきたとき、いつかジュリーにチェロを教えるという話がダンとの間に出た、と教える。しかし、クロリスは皿洗い機を買うためにチェロを売ってしまい、ジュリーはバイオリンを選んだ。老女によると、チェロは人間の体のように大きくて重い楽器であり、楽器の背後にいれば安全でいることができる。演奏者は、弓を弦に沈ませて、音楽を床の中へ埋める必要があるのだ。また別の日に、クロリスはジュリーに、チェロの音は人間の声の音域に一番近い、と言い、高音は叫び声や泣き声、低音は不満や絶望の声だと語る(71)。チェロに対するジュリーの関心は高まっていく。

転校しなければいけないことがわかった後、ジュリーはクロリスに、チェロを教えてくれれば生涯続く友情を築けるという理論を立てた、と言う。さらに、クロリスとノエルがチェロを弾くことには何か理由があるはずだ、と主張し、これから自分に何が起こるのか教えて、とクロリスに言う。彼女は、ジュリーの背が高くなり、胸が大きくならなくても気にしなくなり、ザンダーもすっかり変わってしまっていて、互いに道で会ってもわからなくなることに、大学に行き、20代でつらい恋をするけれど、優しい男性と結婚し、とうとうダンが死んで、この家を完全に引き払うことなどを話して聞かせる。そのうえでクロリスは、今回のことが人生の中で一番重要なことではない、と言って、「恐ろしいことは一時にはただ起きるものなの。乗りこえるしかないのよ」と話す(112)。ジュリーはクロリスのことばを受け入れようとはしない。クロリスはチェロを教えるというが、ジュリーは拒否し、非常階段に立って、アパートの彼女の家の中にいる父と、それぞれ別の場所にいるザンダーとリサ、さらに観客に向かって、“Are you there?”と作品の最初の台詞を繰り返し、劇は終わる(113-14)。

クロリスは、彼女の視点でジュリーの人生を描

き出す。そこからジュリーが学ぶことは、銃撃事件を含めた人生そのものへの新たな見方である。クロリスの話に耳を傾け、想像もしていなかった自身の生き方を思い描くことで、ジュリーは、人はそれぞれの視点をもって、それぞれの人生を生きるしかないことを思い知る。それはまた、世界の中心はないということを示す。彼女がしたことでも何かが起こるような、ジュリーが中心となる世界は存在しない。彼女にとって、地球の端に一人一人が別々に立っているかのような不安と恐怖を与える認識である。だから、劇の最後で、ジュリーは自分以外の存在に対して、「そこにいるの?」と呼びかける。自分のように孤独な人生を懸命に生きている人がいることを確認しようとする呼びかけであり、自分が今ここに存在していることを知らせようとする呼びかけでもある。人はそのように存在を確かめ合うことしかできないことをジュリーは知ったのである。

暴力的な事件が起きたとき、我々はその原因を探ろうとする。もちろん複雑な要因がからみあって起こることではあるが、探ることの意義は大きい。しかし、『この平らな地球』が追究するのは、暴力の原因ではなく、結果である。ひとたび暴力が起きた時に、なんの理由もなくその犠牲になる人もいれば、犠牲にはならなくても変化を強いられる人がいることを作品は示している。直接暴力を描く場面もなければ、暴力を想起させる台詞もほとんどないにもかかわらず、我々観客は、暴力を何らかの形で体験した人々のなかに暴力の痕跡を見出すのである。

注

- 1) フェレンティーノの生年は明らかではないが、2001年の同時多発テロ発生時に13歳だったと書いていることから、1987年から1988年生まれと考えられる。Lindsey Ferrentino, "Playwright's Perspective," *This Flat Earth* (Hanover, NH: Smith and Kraus, 2018) n. page.
- 2) Lindsey Ferrentino and Ted Sod, "Interview with Playwright Lindsey Ferrentino," *Ugly Lies the Bone Upstage Guide* (New York: Roundabout Theatre Company, 2015) 4.
- 3) たとえば、『醜い骨』のロンドンでの上演について、Marco De Ambrogiは、「戦地から戻った人間が変わってしまった世界で経験する痛みについて新鮮な洞察を示している」と述べている。Marco De Ambrogi, "Theatre: The Other Face of Honour," *The Lancet* May 6, 2017: 1789. なお *This Flat Earth* は2017年のEdgerton Foundation New Play Awardsを受賞した。
- 4) Ferrentino, *This Flat Earth*, n. page. 以降戯曲からの引用はこのテキストを用い、ページ数のみ括弧内に記すこととする。
- 5) 作者のフェレンティーノ自身は、9・11同時多発テロが起きた時のことを書いている。前日の9月10日に学校の先生になにか感謝していることを書くように言われ、「戦争がない時代に育ったことに感謝している」と書いた。テロが起きた翌朝それを読んだ時に、自分のせいでテロが起きたように感じたと言う。自分が世界の中心であるように感じる13歳ならではの思考だと書いているが、胸がべちゃんこだと殺されないというジュリーの発想と作者の思い出が密接に関係していることはまちがいない。Lindsey Ferrentino, "Playwright's Perspective," n. page.
- 6) Sarah Lunnie, "Everything Turns Away" *This Flat Earth* n. page.
- 7) Tim Teeman, "'This Flat Earth' Brings a School Massacre to the Stage", *The Daily Beast*, April 10, 2018.
<https://www.proquest.com/blogs-podcasts-websites/this-flat-eath-brings-school-massacre-stage/docview/2023557855/se-2?accountid=15173>
- 8) Tim Sanford, "Introduction," *This Flat Earth*, n. page.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 17K02508 の助成を受けたものです。